



クルマのカタチ、夢のカタチ、 スケッチ中。

Artist
飯泉 麻衣 IZUMI Mai
芸術専門学群デザイン専攻2年



Writer
有須 千夏 ARISU Chinatsu
芸術専門学群芸術学専攻2年

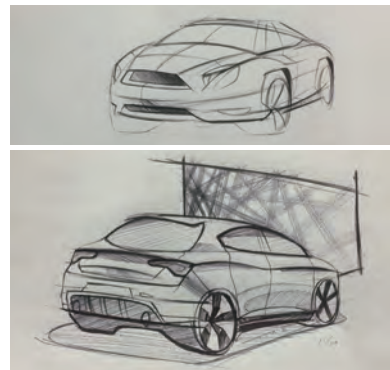
飯泉麻衣さんは、デザインを学ぶ2年生。兄の影響もあり、幼い頃から乗り物が好きだったという。大学1年生の初めの頃は建築系に進もうと考えていたが、同じ専攻の先輩にカーデザインの話聞き、1年生の終わり頃からカーデザイナーを志す。カーデザイナーという夢に向かって、走り出したばかりの彼女の活動と心境に迫るべく、今回インタビューに応じてもらった。

模索中。でも楽しい。

彼女が普段行っている活動の中に、車のスケッチの練習がある。枚数を決め、毎日デザインスケッチの練習をしているのだそうだ。プロの作品を模写することが主体だが、時々自分で構想したものも描くという。飯泉さんが描いたこのスケッチを前にしてインタビューを進めるうちに、彼女のこだわりや目標が少しずつ明らかになった。



スケッチ作業をする飯泉さん



飯泉さんの練習スケッチの一部

—これらのスケッチは、鉛筆で描いているのですか？

飯泉 いや、これはボールペンで書いています。鉛筆でスケッチをすることもありますが、プロの人たちはほとんどがボールペンを使ってスケッチしているらしくて。

—徹底しているんですね。

—大学の授業や課題との両立は難しいですか？

飯泉 カーデザインに夢中になっているので、大学の課題との両立は難しいところもあるけれど、やっていて楽しいです。二年生の春、デザイン専攻の課題の中に、ひたすら木材を削って半球を作るものがあったのだけど、そのときはかなりこだわっていました。性格的に負けず嫌いで几帳面なので、質感だけは誰にも負けないというプライドを持って制作しました。先生や周りの人は、いい意味で驚いていました(笑)。自分には「職人気質」があるように思います。

—車をデザインしようとするとき、やはり「カッコいい」という言葉はキーワードになるように思うのですが、飯泉さんにとって車の「ここがかっこいい！」と思うところはありますか？

飯泉 「パッと見」ももちろんカッコいいけれど、私は特に面構成だとか、車のサイドに入るキャラクターライン(クルマの基本的形状を構成する線。デザインのテーマによっては強い関心を持たせるためにスムーズな車体表面に付け加える、溝や段差などの線)が好きです。この線がちょっと変わるだけで車の印象全体が変わるような気がします。プロのデザイナーにも、ここにこだわりがある人

は結構いるみたいです。

—なるほど

飯泉 でも、「このようにしたい」という自分の理想のデザインがあったとしても、車として構造的に実現が不可能な場合があります。それはプロにとっても難しいことで、何度も相談と考察を重ねて、やっと実際の車の形として出来上がります。有名な人がデザインしたものなどは、みるとやっぱり「おっ」と思いますね。スケッチを見ているだけでも空気感が違うなど感じます。スケッチだけじゃなくて、道路を走っている実際の車なんかは、振り返って思わず見てしまいます(笑)。

—先輩に憧れていると言っていました。スケッチも参考にしているところはありますか？

飯泉 先輩にはかなり影響を受けているから、意見はもちろん参考にしています。カーデザイナーを目指している人たちにはスポーツカーのようなデザインに憧れている人が多くて、スケッチもスポーツカー寄りのものが多いんです。でも、その先輩のデザインはそれと比べてとても個性的です。いつかは私もそんな風に描いてみたいと考えています。それに、車は今、変わる時代に突入していると思います。

—変わる時代？

飯泉 水素や電気で動くものが出てきて、車の構造自体が変わるので、車のデザインも変わる。今までとは違った視点や、柔軟な発想、おもしろい発想が求められます。私はまだ、いわゆる「車オタク」ではないので、逆に何の先入観もなく発想できる場所があるし、ある意味でラクかもしれないです(笑)。



左3枚：日産のインターンシップに向け飯泉さんが考えたデザイン(上から順に、前・横・後ろ)
中央：飯泉さんが考案した車のデザインのコンセプトをまとめたもの
右：初めて企業のインターンに参加した時の飯泉さん

インタビュー中、自分の描いたスケッチを見ながら、「全然だめだ。」と言いながら恥ずかしがってした飯泉さん。しかし、彼女が楽しそうに話す様子を見ながら、彼女の車に対する「好き」が伝わってきたような気がした。

目標をつくる。外へ出る。

カーデザイナーを目指すことを決めてから、現在まで飯泉さんは自主的に活動を行ってきた。2014年5月、通常は3年生から参加するというホンダの企業セミナーに参加した。2日間のセミナーであったが、実際にPhotoshop(写真加工やCG作成をするためのソフトウェアのこと)を使用してのプロの実演を見、彼らから直接指導も受けた。2日間という短い期間中に、アイデア出しからプレゼンテーションまでの全てを行うというハードなスケジュールであったという。飯泉さん自身、カーデザインに興味を持ってから間もなかったため、周囲の熱気やダメ出しに圧倒されたようだが、彼女は「実際に働く現場に触れ、雰囲気を知ることができとても良い経験になった。」と話す。

続いて、彼女はヤマハの「YCH24」というイベントに参加。このイベントでは、いくつかのグループにわかれ、ダンボール紙を使い実際に乗ることのできる車のデザインを提案するという作業を行っ

た。コンテスト形式になっており、飯泉さんのグループが優勝。周りからの評判も良かったという。こちらも2日間のコースで、様々な分野を専門とする人が大勢集まっていた。同じ車を作ろうとしても、それぞれ違った視点や理論を持っているために、グループ内でなかなか意見がまとまらず、作業時間も含めて夜通し作業をしたという。

その他にも、マツダのデザインカレッジ、トヨタのインターンへの参加など、彼女の2年生の夏は充実したものとなったようだ。来年の3月には日産のインターンに参加することも計画しているという。彼女の中ではこれまでの活動を通して、やはり自分と異なる分野の人とふれあい、交流できたこと(トヨタのインターンでは、カラーデザインを専門とする人や、コーディネーターと共に作業ができたという)が印象に残っているようである。外の世界に触れることで影響しあい、意欲や自身を高めるきっかけにもつながるという。飯泉さんは「外に出ることが大切だと思う。実際にやってみたり、行ったりしないと分からないこともあるから」と、デザイナーを目指す若い人には外へ出て行こうとしない人もいることに対し、疑問を持っていることも話してくれた。自ら外に出て活躍する飯泉さんの言葉を聞きながら、筆者も、同じ世代としてこの事について考えさせられるところがあった。

これからのこと

まだ「こんな車がつくりたい!」という具体的な目標は立っていないけれども、それを明確なものにしていくために様々な活動にチャレンジしている飯泉さんだが、彼女はそれを発信することも行っている。筆者が飯泉さんの活動を知ったのも、彼女が自身の作品をSNSでアップしているところを見たのがきっかけである。彼女自身も、周りでカーデザイナーを目指している人がSNS上で公開している作品を見て、参考にしているという。他人の作品を見て意欲を高めることも目的のひとつなのだそうだ。さらに、作品を公開したり見たりするだけではなく、様々な人とのつながりを大切にしたいと飯泉さんは話している。そこから、インターンや企業セミナーでの交流の経験が活かされていることが分かる。これから彼女が公開する作品の変化や、活動を見るのがとても楽しみである。

カーデザイナーという夢を目指し、動き出したばかりの飯泉さん。具体的な夢の車のかたちはまだ明確ではないが、これからの彼女の活動によってそのかたちは徐々に出来上がっていくだろう。そして、それがはっきりとした形になったとき、その車は彼女を乗せて夢に向かって走り出すに違いない。